

飯山知保著

金元時代の華北社會と科擧制度

——もう一つの「士人層」——

渡 辺 健 哉

一九八〇年代以前、日本の遼金史研究は沈滞期を迎えていたといつても過言ではなからう。その背景を著者は「資料の少なさと研究の先行きに對する展望の缺如」と指摘する。しかし近年になって、そうした狀況に大きな變化が生じつつある。その點を著者は、第一に石刻資料の利用が容易になったこと、第二にモンゴル時代史研究の影響、そして第三に中國東北部やロシア沿海州で發掘調査が行われ、そこで出土した文物の整理・公開が進んだことに求める。

こうした研究環境の變化を追い風に、本書の著者である飯山知保氏は研究を開始した。そして現在では、日本の金元時代史研究を牽引する若手研究者の一人として、内外に知られている。

本書は著者が研究を開始した二〇〇〇年代以降に公表した論考をほぼ集成し、金代から元代に至る社會について、「科擧」「士人」を手掛かりに検討したものである。およそ十年ほどの間で精

力的に論考を發表し續けてきただけでなく、一編の著作として本書をまとめあげられたことに對し、心から敬意を表したい。はじめに本書の目次と元となった初出論文の發行年次を（）に記しておく（副題はすべて省略した）。

序論（書き下ろし）

第一部 女眞支配下の科擧と社會

第一章 金代在地有力者層の履歷（二〇〇三年、二〇〇五年）

第二章 金初華北における科擧と士人層（二〇〇四年）

第三章 科擧・學校政策の變遷からみた金代士人層（二〇〇五年）

第四章 楊業から元好問へ（二〇〇六年）

第五章 金代華北在地社會における女眞人の位相と「女眞儒士」について（二〇〇五年）

第六章 金代華北の科擧受験者數について（二〇〇七年）

第七章 金代地方吏員の中央昇轉について（二〇〇七年）

第二部 モンゴル時代の華北社會と科擧

第八章 モンゴルの支配下の忻州定襄縣とその在地有力者像の變容（二〇〇三年、二〇〇五年）

第九章 モンゴル時代華北における出仕傾向の變遷（書き下ろし）

第十章 新設の出仕経路としての科擧制度（書き下ろし）

第十一章 モンゴル支配下華北の科擧受験者數について（二〇〇七年）

第十二章 モンゴル時代華北社會における「士人」の地位（書

き下ろし)

第十三章 櫻山段氏の金元時代(二〇〇九年)

第十四章 『運使郭公復齋言行錄』の編纂と或るモンゴル時代

吏員出身官僚の位相(二〇〇八年)

第十五章 外來民族の儒學習得とその契機(二〇〇七年)

結論(書き下ろし)

今回、評者は本書評を執筆するにあたり、まず原載論文との比較を行った。著者は本書を編むにあたって、引用文をすべて現代日本語に統一し、必要に応じて史料の補充や文章の書き直しを行っている。さらには原載論文を分割して別箇な章として獨立させたり、未發表論文を配するなどして、讀者が金元時代を比較対象しやすいように、構成には綿密な注意が拂われている。こうした姿勢から、既發表の論文をただ並べただけの論文集とは一線を畫そうとする著者の強い意圖を評者は感じた。以下では、各章の内容をまとめながら、若干のコメントを附していく。

二

「序論」では、本書で論すべき問題と金元時代の科擧に關連する先行研究の整理、そして本書での分析手法について述べる。まず前近代中國社會に科擧が及ぼした影響を述べつつ、それが北方(華北)に與えた影響は、いまだに不明な點が多いと指摘する。そこで本書では、女眞・モンゴル支配下の華北で科擧がどのように運用され、それに人々はどうのように對應したかについて考察することを目的と定める。なお、一五―一七頁には各章の要約が記

されており、本書を讀む上での道標となるであろう。

第一部は「女眞支配下の科擧と社會」と題し、金代について検討する。

「第一章 金代在地有力者層の履歷」では、金代の山西忻州定襄縣に着目し、當地の在地有力者の家系に見出せる特徴と、そうした家系相互の關係性について考察する。ここでは、南王里の周氏と砂里の樊氏に注目する。この二氏は族人から科擧受験者を輩出して新たに士人層への參入を目指した家系である。二つの家系に代表されるように、金代中期になると、科擧應試は官位を獲得するための手段として機能し始めた。一方で婚姻關係を確認すると、その相手は必ずしも士人の家系ではなく、むしろ地縁が重視された。つまり、儒學の習得や科擧應試がその家系の社會的地位や交友關係を規定するといった觀念が稀薄であつたことを示している。なお、本章の注(1)では『定襄金石考』成立の背景として閻錫山の存在を想定する。この地域の資料の保全状態と併せて考えると興味深い。

「第二章 金初華北における科擧と士人層」では、金初の戰亂を経て新たな官戸が出現する過程を考察する。まず金初における科擧の制度的沿革とその實施の経緯を跡づける。ついで、華北における漢人(舊キタイ)と南人(舊北宋)の士人層の動向について検討する。科擧によって新王朝の體制に順應しようとする在地有力者層が存在する。その一方で、南人士人のなかには經世濟民的思考のもと、在地で蓄財をしつつ、教化修養に努めるものもあり、そこから新興官戸が生まれてきた。こうした士人層に對し、金朝は科擧を通じて在地勢力を掌握しようとしたのである。

「第三章 科擧・學校政策の變遷からみた金代士人層」では、科擧・學校政策とそれに對應する士人層の動向について、時期を三つに區切つて考察する。はじめに金代の科擧及第者九百八十一人の及第年・出身地を年代ごとに分類し、前代以來科擧應試が盛んであつた、または金初に戰亂の影響が少なかつた地域からは、金代を通じて一定數の及第者があつたことを明らかにする。ついで、科擧・學校政策の變遷を檢證していく。金初は王朝側が制度整備に關與しなかつたため、教育は民間に委ねられた。そのため畫一的な教育がなされず、教育環境に地域間格差が生じ、北宋以來の狀況がそのまま繼承された。なお、ここで金代華北の「士人」について、(A)文人(科擧)官僚、(B)知識人・儒者・有徳者、(C)科擧應試者でありつつも廣く「儒學教養を身につけた識者」の三つに分類し定義づけをする。この時期は一度進士及第を果たせば、用蔭の資格が得られたため、その家系は安定的に官僚を輩出できた。大定年間中期から泰和年間にかけては、國として教育施設の整備が開始されていく時期である。科擧・學校制度が整備され、士人層が擴大されるにつれ、用蔭資格の獲得が容易ではなくなり、科擧をめぐる競争と士人層の流動性が加速されていく。そして、モンゴル侵攻に伴う混亂は士人層にも影響を與え、従来の身分秩序も動搖していった。なお、第三節で金と南宋とで科擧と恩蔭制が運用され、それが相似形を描くように收斂されていくという指摘に興味を抱いた(九〇頁)。

「第四章 楊業から元好問へ」では、楊業(？・九八六)と元好問(一一九〇―一二五七)の家系を通じて、十一―十三世紀の山西北部社會に科擧制度がどのように浸透していったのかについて

考察する。進士及第事例の少なさから、キタイ・北宋治下の管北は擧業への習熟度・積極性の低かつた地域であつた。ところが、金朝の登場は軍事的緊張狀態の解消をもたらし、軍事力の供給地としての意味が薄れていくことで、武藝から擧業への轉換が進み、進士及第の事例も多くなる。既存の社會秩序が崩壊したとき、科擧が社會的身分の維持や上昇を保護する受け皿として機能していったと結ぶ。

「第五章 金代華北在地社會における女真人の位相と「女眞儒士」について」は、所謂「漢化」が一般の女真人にも當てはまるのかという疑問から、在地社會で儒學を習得した女真人Ⅱ女眞儒士の漢化について考察する。まず、女真人の居住形態と村寨・屯營の狀況を確認したうえで、本論に進む。科擧が立身出世のためのはば唯一の手段になり、たとえ進士及第できなくとも、様々な優遇措置に與ることができたため、女眞儒士は儒學教養を身につけることを目指した。女真人にとつての儒學の習得とは、なし崩しの文化的同化ではなく、將來的な生活や社會的地位の向上を見据えた、戰略的な選擇であつた。そして、一二三四年に金が滅亡すると、女真人は漢人に埋没していく。

「第六章 金代華北の科擧受験者數について」では、女眞支配下の華北における科擧の受験者數について考察する。當然概數しか算出できないが、最大で四萬人に届かない數であつた、と結論づける。

金代に關わる最後の論考として、「第七章 金代地方吏員の中央昇轉について」が配されている。元人虞集の指摘を手掛かりとして、儒と吏の區別が曖昧であつたモンゴル時代の淵源を金代に

求め、金代の吏員の諸相について検討する。まず金代吏員の概観を述べ、ついで地方の吏員が中央官界に向かう昇轉ルートについて検証し、最後に吏員が士人からどのように認識されていたのかについて考察する。吏員による高い官位の獲得が制度上可能であったとしても、吏に對する價值觀に變化が生じることはなかった。第二部は「モンゴル時代の華北社會と科擧」と題して、モンゴル時代について扱う。

「第八章 モンゴル支配下の忻州定襄縣とその在地有力者層の變容」は、第一章で考察した内容を引き續きモンゴル時代を舞臺に検討したもの。第一章と同じく、第二部の導論になっている。

モンゴル侵攻後、家系の存續を圖る人は、モンゴルに歸順した。實質的な援助は與えられなかったとしても、支配下の民を率いることができ、村落で指導的役割を果たすことができたからである。そして、こうした歸附者の家系は文武官僚の重要な輩出母體を形成する。金末の戰亂とモンゴルの侵攻は、華北に秩序の再編成をもたらした。

「第九章 モンゴル時代華北における出仕傾向の變遷」は書き下ろしである。すでに指摘されているように、モンゴル時代の出仕・選轉経路は多岐にわたった。近年に至つて見直しが進められつつも、在來社會への眼差しが確認できていないという點を強調して、事例を網羅的に集めて検討する。まず山東についていえば、一二七〇年頃までは從軍での出仕事例が多かったが、軍事活動が沈靜化すると、吏員・推擧・縁故による出仕へと變化していく。

河北平原西部は山東とはほぼ同じ傾向を示している。奉元路（陝西）は安西王府が置かれたこともあって、これに伴う推擧・辟召

も多かった。その結果として無位無冠の人間が知州に就任する事例までもみられたという。結論として、最も効果的な出仕の糸口は京師での獵官活動であり、モンゴル王侯の位下・投下領が魅力的な出仕先であったとまとめる。

本章では、各地域ごとの共通性と差異を剝出してみせたが、結論の通りであるとするならば、格別に地域にこだわって分析する必要は必ずしもなかった気がする。一方で、個々人の有する能力の違いこそ大きかったはずであり、そこからの検証も必要ではなかったか。

「第十章 新設の出仕経路としての科擧制度」は前章の考察を踏まえ、元代中期に導入された科擧が華北社會にどのような影響を與えたのかについて検討する。科擧の再開は入仕の途の一本化であり（建前ではあるが）、多岐のルートが存在したそれまでの社會に大きな變化をもたらした。まず、吏員出身者が世代を超えて官員を輩出できる可能性は大幅に減少する。救済措置が存在したとはいえ、科擧及第は困難なものであったため、會試不合格者のなかには國子監に入學して、有利な道を模索する者もいた。科擧が運用されるようになると、及第の可能性は低くとも高位高官を得ることのできる経路の一つと認識される。しかしながら合否判定への不満が噴出し、拔け道として國子監への入學も競争が激化していく。科擧は高位官職へ迅速に到達する手段ではあるものの、知識人としての自負心の發露を除き、徐々に魅力を感じる出仕経路ではなくなつていった。⁽³⁾

「第十一章 モンゴル支配下華北の科擧受験者數について」では、第六章に引き續いてモンゴル時代の華北の科擧受験者數の検

計を行う。やはり裏づけとなる事例が少ないため論證は難しいなか、一萬人から二萬人程度という概數を提出している。

「第十二章 モンゴル時代華北社會における「士人」の地位」も書き下ろしである。まずモンゴル時代の「士人」の用例を検討し、用例上は第三章で扱った金代の士人と變化がなかったとする。ただし、モンゴル時代特有のものとして、儒戸から輩出される儒人があった。京兆府學に屬する儒人がモンゴル時代末期まで官學を中心紐帶していた事例を紹介し、儒人たちは在地有力者層を形成していたと述べる。一方で儒戸から輩出された儒人ではない學生・官學生も存在したが、彼らに優免特權が與えられるのは元代後半期のことであり、刑法上の特典も認められなかった。さらにその外縁には民間の教育施設で修學する者もいた。モンゴル時代の儒人への特權は制度的裏づけのあるもので、南宋の士人層とは成立の契機を異にする。

「第十三章 稷山段氏の金元時代」では、金元代にかけて有力な家系であった稷山段氏に着目し、華北の士人層が金代からモンゴル時代へとその社會的地位を維持する上で直面した問題について検討する。段氏は三人の進士及第者を輩出した、金代でも成功した家系の一つである。モンゴルの侵攻に伴う汾水下流域の秩序の崩壊によっても、段氏は變わらず官員を輩出した。それには、モンゴル配下の軍閥・地方官僚の庇護を得たこと、道學への轉換を圖ったこと、段思眞の國史院への出仕と閭復による推舉などがあつた。ただし閭復の死後、有力な縁故を持たなかったため、家系は再起できなかった。つまり、科擧が機能していなかった時代は、安定的に官員が輩出できない社會であつたともいえる。

本章は地域に即するのではなく、一つの家系に注目して検討した。ここで例示されているように、庇護者がいなくなることでの家系が没落していくこともあつた。宋代や明代のような「科擧社會」が現出したとはいえない元代にあつては、見通しに狂いが生じると、家系の維持を圖ることが難しいものであつたことを示唆している。

以下の二章は、通説とされているものを、これまで扱われなかった史料にもとづいて實證的に検討し直したものの。「第十四章『運使郭公復齋言行錄』の編纂と或るモンゴル時代吏員出身官僚の位相」では、郭郁に關する『運使郭公復齋言行錄』と『編類運使復齋郭公敏行錄』を材料として、吏員出身で儒學教養を備えた漢人官僚の實像を検討する。はじめに二つの書物の傳存過程の確認を行う。ついで郭郁の官歴について述べ、二十年の長期にわたつて吏職を勤めあげるうちに、ブリルギデイと結びつき、武宗カイシャンの即位に伴い、順調に出世したことを明らかにする。そのうえで『言行錄』『敏行錄』の編纂は、晩年に朝堂の高官を目指すための材料でなかったかと推測する。最後に儒者としての郭郁の活動について述べた。易學に傾倒したこととその學識が評價され、華々しい交友關係の反面、一般に江南人が北方人を見下していたために郭郁もそれを感じ、さらに吏員出身という經歷が意識されていたであろうという。モンゴル時代は官と吏との懸隔が非常に狭かつた反面、傳統的な吏員觀は存在し續けた。

本章で取り上げられた郭郁は、儒學の教養にもとづきつつ士人と交友關係を結び、名前が知られながらも、吏人ということでは『元史』に立傳されることもない、元朝時代の特長な事情を象徴

する人間といえる。儒學教養を有する「吏」の出現という事實、ある個人に注目してその具體的實相を明らかにした。本章で例示されている『言行錄』『敏行錄』のような性格を有する書物が他にも存在したのであろうか。

「第十五章 外來民族の儒學習得とその契機」は、すでに様々な形で指摘される漢化の實態を、『述善集』に描かれる軍官家系の濮陽タングタイ家を事例として検討する。モンゴル時代華北に駐屯した軍官家系にとって、十三世紀後半の戰爭（とくに南宋征服戰爭時）が軍人として官職を獲得し、上昇する最後の機會であった。それがひと段落を迎えると、軍戸の經濟的基盤が弱體化するようになり、加えて餘剩軍官が社會問題と化す。こうしたことを背景に人々は儒學の習得に向かつていく。さらに儒學習得の動機は、家系の興隆のために次世代以降の學問教育に投資すべきという考えと、漢人親族の影響であったと想定する。モンゴル上層部・高官との結びつきがない場合、または大都での遊學の餘裕がない場合、儒學の習得は社會上昇が可能な数少ない手段であった。タングタイ家の場合、二人の國子監生を輩出し、そこで築かれた人脈が次世代以降の族人の國子監入學にあたり推薦を得るための保證になったという。つまり、一般に漢化のメルクマールの一つとして知られる儒學教養の習得とは、自分自身や家系の將來を見据えて選擇された計畫的な行爲であった。

結論として、まず本書で述べたことをまとめる。その上で、科舉制度の受容と儒學教養の習得は多民族が混在する華北にあつては、社會的地位の確保や官職の獲得を與える受け皿の機能を果たしていた、とする。そして、この時期は北には「もう一つの士人

層」が形成されており、異なる「中國社會」が存在していたと結ぶ。

三

著者は研究を開始するにあたって、まず「金元代華北社會研究の現狀と課題」と題する研究史の整理を公表した。⁽⁵⁾今回、評者は改めて當該論考を読み直した。すでにこの論考で、本書で課題としている華北研究の低調が強調されており、著者の問題關心は首尾一貫していることが確認される。加えて本書で扱われているいくつかの問題についても言及されており、この論考を公表した時点で、すでに本書の見取り圖が著者には見えていたのではないかとさえ評者には感じられた。少なくとも研究を開始する段階で、本書に結實されたような「金元代」を通觀する構想がすでに練られていたのは確實であろう。

以上のようにまとめられる本書は研究史上にどのような位置づけられるのであろうか。あくまで評者の狭い關心からになつてしまいが、科舉研究と金元時代研究に即して述べていく。

科舉に關わる研究は、制度の分析から始まり、科舉を背景とする社會流動性の研究に發展していった。さらにそののち、ブルデューらの文化的再生産の議論を取り込みながら、所謂「文化資本」の有無を問題として、科舉によつて流動化される社會はあくまで限定的なものであったことが指摘されている。現在、中國大陸では劉海峰氏によつて提唱された「科舉學」の名のもと、文史哲の枠を超えた多様なアプローチから研究が行われている。日本ではとくに明代を中心とし、寧波の天一閣に藏される「登科錄」

「會試錄」「鄉試錄」が新たに公刊されたのを機に、これを活用した制度や思想の研究が進められつつある。一方で元代については、畢業書に對する關心が高い⁶⁾。

このような状況を踏まえると、本書は廣義と狹義の兩方を兼ね備えた科舉研究といえるであろう。狹義の研究としては、一定の蓄積のある制度研究を踏まえて、受験者數を追跡した第六章と第十一章、科舉・學校に關する政策を時系列に沿って検討した第三章、複數ある出仕経路のなかに科舉を位置づけた第十章などがある。従つて、それ以外の章は廣い意味での科舉研究と捉えることができる。

もう一點、すでに繰り返し述べているように、本書は金元代を通觀した研究としても位置づけられる。從來の日本人による研究では、「金」「元」と王朝毎に區切り、しかも後者、元Ⅱモンゴル時代に比重が置かれてきた。これに對して本書では、歐米の研究も視野にいれながら、そこを一つのまとまりと理解して考察を行う。したがつて、第一章と第八章、第六章と第十一章、そして第十三章には金元時代を通觀する著者の本領が發揮されている。さらに、第二部の書き下ろしの各章についても、第一部で検討した内容と對應させることにより、金元時代を一つのまとまりとして捉えようとする意圖が窺える。金元時代をまとめた考察は、思想史の分野には存在するものの、歴史學の分野では存在しない。社會に焦點を當て、その同質性・異質性といったものに目を向けながら、この時代を通觀しようと試みた點は本書の意義として評價されるであろう。

扱われている史料についても觸れておきたい。本書では網羅的

に收集した事例にもとづく分析が隨所でなされている。たとえば、九七頁で進士及第者の事例を收集するにあつても、多くの事例を集め既存の研究を遙かに凌駕する成果を得ている。また第九章では、二四七―二八〇頁に提示された膨大な事例にもとづき分析がなされる。こうした綿密な史料収集がなされているため、論旨の説得力はより一層増す。この背景として、近年の史料閲覽の環境整備の向上があることは言うまでもない。だが一方で、既存の文獻の中からの發見、また読み直しによって得られた成果も大きいのである。第十四章で扱った『言行錄』『敏行錄』は、圖書館で新たに發見したといった性格のものではなく、既存の叢書に収録されているものである。すでに刊行されている大部な叢書類にも未だに見逃がされている史料が數多く存在していることに改めて氣づかされる。そして、典籍史料に加えて本書で重要な役割を果たしているのが、縦横無盡に活用されている碑刻史料である。著者は船田善之、井黒忍、小林隆道の各氏とともに中國各地の碑刻資料の調査を行い續けている。本書にもそこで得られた知見が記されており、現地調査のデータとしても重要である（例えば、一〇〇頁、一五一頁、二〇七頁など）。ただしこれについても、基本的に明清代・中華民國期に編纂された地方志や石刻を集成したものに録文が收録されている碑刻史料を著者は利用している。碑刻資料を調査によつて確認しつつも、前人によつて集められた史料の丹念な読み直しによつて成果を得ている。史料の絶対數の少ない時代であればこそ、このような史料を貪欲に集める姿勢は缺かせない。

最後に全體に渡る疑問點を舉げる。

第一に、本書によって明らかにされた金・元時代の異なる現象が、久々に領域的な統一を迎える元代後半期に至って、如何なる過程を経て整理されていったのか。本書では金代と元代との様々な面が対比的に語られている。そもそも、金代は科擧が官員登用の主要ルートであったが、元代の出仕経路は科擧だけではない。他にも例えば、金代では士人に徭役や刑法上の優免が認められなかったのに對して（ただし、この點は一〇一頁で慎重に注記している）、元代ではそれが認められた。吏員の高位官職への到達についても、元代に比較して金代は少なかった。さらに一例をあげておく。『元史』卷一四八、董文忠傳に「陛下（世祖）毎に言う『士の經を治め孔・孟の道を講ぜずして詩賦を爲るは、何ぞ身を修むるに關わり、何ぞ國を治むるに益せん』と。是れより海内の士、稍うやく實學に従事するを知れり」とある。世祖（クビライ）は「士」と一般化しているが、ここでは金代科擧の詩賦への偏重が念頭に置かれているのであろう。それに對し、元代では「實學」を重視する姿勢へと轉換が圖られた。本書によつて金と元の二つの時代相のコントラストが明瞭になればなるほど、こうした異なる現象がどのように調整されて元代後半の科擧再開につながっていくのかと感じた。そのうち元代中期に至つて科擧は再開されたが、その實施にあたつては、江南の士人層は勿論、それを運用する官廳にまで混亂は及んだのである。従つてこの問題を突き詰めていけば、その延長線上には、最終的に華北と江南を統合した明代社會が射程に入ってくるであらう。

第二に、この時期に爲政者が科擧を運用した理由について。本書で、科擧の果たした機能について端的にまとめられている箇所

を引用する。

多元的な金元時代華北において、儒學教養の習得や科擧制度の受容は、生活の安定や昇進をもたらした在來の軍事制度や社會構造が變質・崩壞した外來民族に對して、社會的地位の確保や官職の獲得を與える受け皿としての機能をはたしたといえる（四二七頁）。

そのうえで、科擧と儒學習得は華北における社會統合システムの複數存在する選擇肢の一つであつたという。科擧によつてもたらされた結果は本書を通じて理解できた。だが、科擧を行った理由は奈邊にあるのか、という點は改めて考えさせられた。元代においては、科擧の再開を決定した皇慶二年十月の中書省の上奏の中でも、「今以開せざるは、或は其の事を沮む者有らんことを恐るればなり」（『元史』卷八一、選舉志一）とあつて、科擧の再開が決定されてもお政府の中に反對する勢力が存在したことを示唆している。當然、金・元代で科擧を實施した理由については、「序論」で紹介されている先行研究で説明がなされている。だが、本書の検討を通じて新たに得られた知見はなかつたか。前述した反對を押し切つてまで、また、他の仕官ルートがあるにも拘わらず、なぜ敢えて支配民族の異なる金・元政府が科擧の運用に踏み切つたのか。この點はまだ考察の餘地が残されている。

第三に、士人層の具體的な活動について。本書の中で士人の形成されていく過程は明らかにしたが、彼らが在地社會に對して如何なる社會的な活動を行い、それに對して社會はどのような反應をみせたのであろうか。宋代士人の具體的な活動については、本書でもたびたび引用される、高橋芳郎氏の論文中に言及されて

いる。⁽⁹⁾ 恐らく扱う史料が墓誌銘など一定のバイアスのかかった史料になるため、高橋氏の述べるところの「士人の「正」の側面、肯定的な活動」が強調されることになると豫測される。本書なかで引用される史料の中にも、そうした活動の一端は記されているが、総合的に論じられているわけではない。従って、高橋氏のいう「負」の側面」まで見出せれば、その實態はより具體性をもつて論じられよう。士人の包括的な検証は、宋代の士人や、次の明清代の郷紳とよばれる在地有力者との對比に繋がっていく。さらにそれは、歐米の研究者による「ローカルエリート」研究、中國・臺灣の研究者による「地方精英」研究との討論をも可能にさせるに違いない。

第四に、華北において士人の教養はいかに形成されたのかという疑問である。元代の江南については、科擧再開が決定したあとの延祐二年（一二二五）の自序を有する『程氏家塾讀書分年日程』が知られる。一般化が可能であるかは慎重な検討が求められつつも、本書が教育カリキュラムの代表的モデルとして理解されている。一方で金朝治下の社會や、元初の華北ではどのような教育がなされたのであろうか。この點と關わつて想起されるのは、華北の出版に關わる考察である。出版業が盛んだった山西の平陽については、本書の中では「韻書や工具書の類が盛んに出版された」地域として言及され、平陽に隣接する晉北の士人は擧業にあつて相應の便宜がもたらされたと述べるに止まる（二一七頁）。視點を中都・平陽・寧晉・開封といった金代の出版業を支えた地域にまで視點を廣げれば、もう少し掘り下げた検討が可能になるのではなからうか。しかもこの地域は元代でも引き續き出版業が

盛んな地域であつた。勿論、江南の——特に元代では建陽など——諸都市と比べれば、出版物の點数が少なかったことは疑いない（七九頁でも指摘されている）。そうしたハンディは理解しつつも、それでもなお、金元時代の華北における書物の傳播と科擧との相關關係は氣になる問題である。そしてその解明は華北における教育基盤の在り方にも關わつていくのではなからうか。

四

以上、主として評者の能力の限界に起因するものであるが、疑問點というよりもむしろ今後の課題を羅列することにおわつてしまった。著者および讀者のご寛恕を乞ふ次第である。

近年、九十三世紀の東アジア世界の研究は、これまでのチャイナプロバーを主とするアブローチから脱却し、北アジア・北東アジア、さらには日本や朝鮮からのアブローチが積極的になりつつある。評者の目から見ていささか停滞氣味の感がある宋代史の研究者には、本書やこれから生み出されていく、遼・金・西夏・元代に關わる研究に對して積極的に發言していつて欲しいと思う。そこでの對話が成立することで、たとえば日本獨自の學說である「唐宋變革論」も再び昇華されて別な形で世界に發信されていくのではないかと夢想するからである。本書評では扱えなかった、制度面に關わる問題などは、すでに豊富な研究蓄積を有する宋代史の研究者からの反應を特に期待したい。

なお附言すれば、本書は、まさにこれから當該時代の研究を志す人にとって、指針となる書物になっていくと豫想される。石刻資料や文集史料、そして新たに閲覧が可能になった書物など、

様々な史資料の利用方法から始まり、事例を丁寧を集めたうえでの統計的な分析、特定の地域や家系に注目する視點など、本書で提示されている多様な研究手法は今後この時代の研究を進めるにあたつて大いに參考になるであらう。

本書に對して、その限定された地域性に批判が向けられるかもしれない。しかし、この點については著者自身が十分に認識しており、すでに次の研究を進めつつある。おそらく本書をまとめる過程で課題として浮かび上がってきた、宗族の問題に次は進んでいくのであらう。そうした意味で、本書は到達點では決してなく、次なるステップに向けた一つの通過點であると確信する。著者の研究が更なる發展を遂げ、次の成果が生み出されることを強く期待して、拙い本書評を閉じることとしたい。

註

- (1) 以上の整理は、飯山知保「遼金史研究」(遼藤隆俊(他)「編」『日本宋史研究の現状と課題——一九八〇年代以降を中心に』汲古書院、二〇一〇年)にもとづく。
- (2) この點で、閩錫山の山西における文物保護に對する意識の高さについて、大正年間に現地調査を行った常盤大定が「然るに氏(齋藤悟洞のこと…評者注)の談話中に、模範督軍の嘉稱ありまた教育督軍の名聲を馳せて居る閩錫山氏が、二年以來熱心に古碑を蒐集せるものが、まだ見た事はないが、傳公祠にあるさうだといった」と言及する。常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』(支那佛教史蹟査記刊行會、一九三八年)八九頁を參照。
- (3) 參考までに附言しておく。本章の考察において重要な基礎研究となつてゐるのが蕭啓慶氏による一連の進士及第者の復元研究であり、これは本書が出版されたのち、『元代進士輯考』(中央研究院歷史語言研究所、二〇一二年)と題してまとめられた。
- (4) 「科學社會」については、近藤一成『宋代中國科學社會の研究』(汲古書院、二〇〇九年)「序論」を參照。
- (5) 飯山知保「金元代華北社會研究の現状と展望」(『史滴』二三、二〇〇一年)を參照。
- (6) 元代科擧に關する近年の研究動向については、拙稿「近年の元代科擧研究について」(『集刊東洋學』九六、二〇〇六年)、及びこれを増補・改定した同「近年元代科擧研究——以日本的研究介紹爲中心」(『科學學論叢』二〇一〇一二)で整理を行っている。
- (7) この點については、舩田善之「石刻史料が拓くモンゴル帝國史研究——華北地域を中心として」(早稻田大學モンゴル研究所「編」『モンゴル史研究——現状と展望』明石書店、二〇一一年)にまとめられている。
- (8) 三浦秀一「元朝南人における科擧と朱子學」(『中國心學の稜線——元朝の知識人と儒道佛三教』研文書院、二〇〇三年)を參照。
- (9) 高橋芳郎「宋代の士人身分」(『宋・清身分法の研究』北海道大學圖書刊行會、二〇〇一年)を參照。
- (10) 平陽における出版については、李晉林「金元時期平水刻版印刷考述(上)(下)」(『文獻』二〇〇一—二、三)を參照。

- (11) 本書に収録されなかった論考として、飯山知保「モンゴル時代華北における系譜傳承と碑刻史料」(『史滴』三〇、二〇〇八年)がある。
- (12) なお、すでに本書の簡単な紹介文が高井康典行氏によって公表されている(『史滴』三三、二〇一一年)。併せて参

照されたい。

二〇一一年三月刊 東京 早稻田大學出版部
A五版 四三四十一頁(英文要旨・索引) 八九〇〇圓